

<実施例4> 市民性を育む日本語プログラム

報告者：須藤聡子・青木由香（荒井学園高岡向陵高等学校）

実施校の制度 課程：全日制 学科：普通科 単位履修の仕組み：学年制 対象生徒：2年生 タイプA（滞日期間：1～3年程度） 実施形態：少人数 主たるプログラム：プログラムD+B 実施した科目：学校設定科目「キャリアアップ日本語」（2単位） 担当者：日本語指導員（非常勤講師）（+本校教諭のサポート）

4.1 プログラム 編成の考え方

(1) 社会参加のための市民性を育む日本語学習

報告するプログラムの実施例は、学校設定科目「キャリアアップ」のグループとして行った日本語の授業である。キャリアアップの時間は2時間×2回で週4時間設定されているが、現時点では年度や学年によって日本語の時間が週4時間になる場合と週2時間になる場合があり、定まっていない。（2024年度については、週2時間で2年生のみに日本語の時間が設けられた。）全体的に見れば、限られた指導時間内に日本語のレベル等まちまちの生徒が集まることから、授業の焦点が絞りにくいという問題があった。

一方で、目標設定、指導内容・方法、評価方法については自由度が高く、対象生徒の実態やニーズに寄り添った柔軟な対応が可能であった。そこで2023年度より、日本語の知識・技能を体系的に学ぶ学習（プログラムBタイプ）に加え、生徒の声を拾って課題を設定し、プロジェクト型の日本語学習を実施した。その成果から2024年度も、対象生徒の興味・関心に沿ったプロジェクトベースの活動（プログラムタイプD）を中心に日本語のプログラムを組み立てることにした。現実の問題に向き合い、日本語で課題に取り組むことを通じ、生徒には将来の社会参加に向けて、問題解決のために社会に働きかける力、つまり市民性が涵養されると考えられる。（2023年度の「キャリアアップ日本語」での反省や実践を通して得た知見については、4.4に資料として紹介してある。）

なお、本プログラムは、日本語指導体制・カリキュラムをこれから整備していくにあたって、過渡的な措置として実施した非常勤講師による日本語の授業の例である。

実施校の外国人生徒等の受入状況・日本語指導

実施校は、特定の部活動に力を入れたい生徒や不登校等経験者、県立高校を志望しつつも受験で不合格になった生徒等、多様な生徒を受け入れており、「自らの価値観を持ち、地域社会の未来を支える使命感を持った生徒の育成」という学校教育目標の下、地域連携と多様性を強みとする教育活動に力を入れている。入試において外国人生徒等への特別措置や枠などは設けていないものの、全校生徒635名のうち外国人生徒等が約1割を占めている。日本語指導が必要な生徒の在籍数は年々増えており、実施校の Graduation Policy「他者と協働しながら課題解決に向かう、未来を担うグローバル人材を育成する」に即した日本語の力を生徒が獲得できるよう、日本語の指導体制およびカリキュラムの整備は喫緊の課題となっており、現在、生徒の実態に応じた柔軟な支援体制の構築に向けて検討を進めている。

実施校では、2～3年生を対象として学校設定科目「キャリアアップ」という時間を設けている。各生徒が将来の目標や興味・関心に合わせて、資格試験の勉強をしたり、スポーツに励んだり、プログラミングに挑戦したり等、それぞれのグループに分かれて活動を行う。このキャリアアップの活動の一つとして「日本語」が設けられており、本人の希望や担任の勧めなどにより「日本語」を選択した生徒が集まって日本語を学んでいる（対象者の明確な基準は特に設けられていない）。

(2) 育みたい「ことばの力」とプログラムの組み合わせ（卒業までの3年間）

対象となる生徒は年度によって異なるが、滞日歴は日本生まれ・育ちの生徒から来日1年程度の生徒ま

でと多様である。また、生徒の日本語の力も母語等を交えながらであればようやく日常会話がこなせるレベル（日本語能力試験ではN4～5程度）から、読み書きや教科の学習には多少困難があるものの日常会話には何の支障もないレベル（N2程度）までと幅広い。そのため、日本語の知識・技能については、卒業までの目標を一律に設定することは難しい。1年次には、生徒それぞれの日本語の力に応じ、放課後の補習として日本語指導を行う。2年次の「キャリアアップ」での日本語学習では、日本での学習経験も日本語の力も多様な生徒が、一つのクラスで学ぶことの意味を考え、各々がもてる力・個性を発揮しながら、「他者と協働しながら課題解決に向かう」ための日本語力の育成を目指す。また、1年次の高等学校生活で生じた学習参加や友人関係における困難や課題を相対化して捉え、その解決のために周囲に働きかけるための日本語の力を高める。3年次には、生徒それぞれの卒業後の進路希望に基づき、実現のために求められる日本語の力をねらいとしての学習の場を提供する。（ただし現状として、教員の確保や施設設備の状況により、各年次の科目の開講や授業時間数が年度ごとに変動することがある。）

＜2年次の日本語学習：日本語プログラムの組み合わせ＞

	1年	2年	3年
プログラム A「生活のための日本語」	放課後補習 生徒の力に 応じた日本 語学習	→	「キャリアアップ」 希望する進路に応じた 日本語学習
プログラム B「日本語基礎」			
プログラム C「技能別日本語」			
プログラム D「日本語プロジェクト」			

(3) 外国人生徒等の教育・支援活動（学校全体の取り組み）

まだ十分には日本語指導体制が整っていないこともあり、個別的・部分的ではあるが、現在行われている日本語の指導以外の教育・支援を以下に示す。

＜卒業までの指導・支援の全体＞

	科目(単位)／具体的な支援内容
日本語指導 (単位)	1年:放課後日本語補習(週1回1～2時間程度)(0単位) 2年:学校設定科目「キャリアアップ」の中の選択「日本語」(2～4単位) 3年:学校設定科目「キャリアアップ」の中の選択「日本語」(2単位)
教科学習支援	定期考査の漢字にルビ ワークシート等の多言語化・漢字にルビ(担当教員による)
母語支援	面談の通訳 保護者への通知の翻訳
キャリア支援	3年次の「キャリアアップ」の一部は、学年全体で企業説明会・オープンキャンパスへの参加や履歴書・志望理由の書き方講座、面接練習などを行なっているが、日本語指導者が入り込みの形でサポート
その他	

4.2 実施した日本語プログラム 授業名「キャリアアップ・日本語」

履修学生は2名で、滞り期間は1～3年の生徒である。1年次の日本語の放課後補習の時間の様子からは、教科学習への参加が困難で、友人関係も限定的であり、自己肯定感をもてずにいる様子であった。また、そうした状況を周囲にも伝えられずにいた。そこで、「キャリアアップ」で実施する日本語プログラムでは、学校生活において

対象生徒がどのような困難や問題を抱えているかを周りの人に知ってもらうことを第一目標としてプロジェクトを進めることにし、それに必要な日本語表現を習得するための学習内容を設定した。

かれらの自己肯定感を高められるようにと考え、周囲に悩みや不満等を伝える(問題提示)だけに終わらないように、問題を解決するためのプロセスを考え、実際に解決に向けて行動するように設計した。具体的には、提案書の作成などの活動を適宜実施した。プロジェクト遂行の各プロセスに必要な言語機能をピックアップしたモデル文やワークシートを作成し、言語形式にも着目させ、遂行のために適した日本語の表現方法について検討させた。さらに、モデル文を発展させた会話練習を取り入れるなど、スモールステップで日本語を学習できるように工夫を行った。

先にも紹介した通り、学校設定科目「キャリアアップ」は、元々各生徒のニーズに合わせて内容を自由に設定できる特長がある。以下に示した年間指導計画(シラバス)も、固定的なものではない。参加した生徒のその時々の興味・関心や状況に合わせてプロジェクトをユニット化して考案、選択したり組み合わせたりした結果として出来上がったものである。2024年度のプログラムは、5つのプロジェクトユニットからなる。

また、「キャリアアップ・日本語」での学びが、生徒らの普段の学校生活につながり、良い影響をもたらすことができるよう、学校行事・活動などの流れを汲み取りながらできるだけ関連性を持たせた。例えば、ユニット4<伝えよう・紹介しよう>として、学校祭で宗教や文化について紹介する掲示物を日本語で作成するプロジェクト学習を行った。

①目標

自分のことや自分が考えていることを、自身と関わる多様な他者に、様々なリソースを利用しながら日本語で自信をもって伝えることができる。

②年間指導計画 (1科目分)

1 科目名・単位数(時間数)	キャリアアップ・日本語 2単位(70時間)		
2 対象生徒 2人	滞日歴:1~3年。日本の中学校を経ずに本校に入学してきた生徒、および中学校2年生の途中で来日した生徒。 日本語の力:定型表現を主とした簡単な日常会話はできる。一人は小学校低学年程度の漢字を学習中であるが、もう一人はカタカナの文字が音と一致しないことがある。二人とも日本語能力試験のN4程度。 母語の力:会話・読み書きともに年齢相応の力を持っている。 教科等の力:一人は得意教科(理数系)もあるが、国語等の授業についていくのは難しい。もう一人は全教科において一斉授業への参加が難しい状況。		
3 履修学年	2年		
4 目標	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
	自分のことについて表現したり意見を述べたりするために必要な語彙・表現	自分のことに関心を持ってもらうために取り上げる事柄を選択し、自分の意見を説得的に伝えるため	様々なリソースを利用しながら、積極的に日本語で自分の考えを相手に伝えようとする。

	形式について理解し、使うことができる。	の根拠を考え、場面や相手、状況に合わせて日本語の表現を工夫し、相手の反応を見ながら対応することができる。	
5 プログラムのタイプ	<input type="checkbox"/> A(生活のための日本語) <input type="checkbox"/> B(基礎日本語) <input type="checkbox"/> C(技能別日本語) <input checked="" type="checkbox"/> D(日本語プロジェクト) 主なプログラム:◎ 関連付けて実施するプログラム:○		
6 主なリソース	主に担当教員作成のワークシートなどを使用。特定の決まったテキストはないが、必要に応じて『教科につなげる日本語 基礎編』(スリーエーネットワーク)などを部分的に活用		
7 指導計画(シラバス)			
時	トピック・内容／主な活動／語彙・表現など		
第1～10時 (10時間) ユニット1	<自分の学校について話そう> ・ 自分の学校についてマッピング(『教科につなげる日本語基礎編』「トピック2 学校生活」を用いた語彙学習、リスニング、読解、文法練習)(8回) 語彙学習(形容詞。カードを使い反意語と照らし合わせ語彙を増やす。ひらがなで書かれた形容詞を漢字に書き直してみる。自作プリントにて文章を読みながら当てはまる形容詞を書き入れる。)(2回)		
第11～18時 (8時間) ユニット2	<自分のことについて話そう> ・ 「自分のことについて話す」(テーマは自由で話したい内容について調べる。宗教、国の高校、国の歴史と戦争、食べ物、好きなこと等。その内容の中からいくつか選び、既習文型を使って文を作ってみる。)(2回) ・ 「比べてみよう」(「自分のことについて話す」の発展。高校、自分のクラスと他のクラス、自分と他者、過去と現在など。比較表現と最上級表現を学ぶ。比較表現を使った文章問題を解いてみる。)(4回) 日常会話の練習(4コマ漫画のセリフを考える。丁寧形、友達とのカジュアルな話し方、独り言など違いを理解。感情表現を増やす。ストーリーの人物になりきってセリフを言う。)(2回)		
第19～24時 (6時間) ユニット3	<自分の将来について考えよう>(職業調べ)(6回) ・ 身の周りにどんな仕事があるか話し合う。AIによってなくなる／なくなる仕事とは?意見に出た仕事で興味がある仕事は何か、なぜ興味があるのか理由を言う。 ・ 興味がある職業について調べる。企業名、場所、仕事内容、給与、ホームページを見える等。 興味がある職業に就くためのプロセスを考える。進学先を考えてみる。どんな大学や専門学校があるか。どんな勉強ができるか等調べる。		
第25～30回	<伝えよう・紹介しよう>(学校行事や地域交流活動に使う掲示物作成)(6回)		

<p>(6時間) ユニット4</p>	<ul style="list-style-type: none"> 国の食べ物、衣服(普段着とイベントで着る伝統的衣装)地理、行事、国旗、生息している野生動物、有名な人物の紹介。 <p>写真と説明文をパワーポイントを使って作る。</p>
<p>第31～58時 (28時間) ユニット5</p>	<p><学校を変えよう></p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 「もし、私が校長先生だったら？」(ワークシート)(2回) 仮定表現 (2) 要望の一つを選んで具体化し、提案書①を作る (2回)★ 「～たいです、～たらいいと思います」「なぜなら～からです」「～ば、～に/くなると思います」「たとえば～はどうでしょうか」 (3) 提案書①を提出する(2回) 提案書の表現を見直して表現を調整→提出 (4) 先生からのコメントをもらって読む(2回) (5) クラスの中で一つの要望(ハラル食品)にしぼり、食堂への提案書②を作るために、仕入れなどの方法(コンビニ)について調べる(2回) (6) 提案書②を書く(ワークシート)(2回) どうやったら伝わる提案書を書けるかのディスカッション (7) 食堂にアポをとる(2回) 自己紹介、依頼表現 (8) 食堂に提案書②を提出してプレゼンテーション(練習→本番)(2回) 食堂の人との話し合い(質疑応答→食堂の方たちが「ムスリム」「ハラル」について何も知らないことがわかった) (9) ハラル食品のリストを日本語で作成する(2回) →食堂にリストを渡しに行く (10) ポスター作り(新しく食堂に置いてもらうハラル食品について、ハラルについて等)(10回) →ポスター掲示(担当の先生に日本語で掲示の依頼をする)
<p>その他 (12時間)</p>	<p>ユニット1～5の実施途中で行われる学年集会や全校集会等</p>
<p>8 評価方法</p>	<p>考査はなし。平常点のみで評価する。</p> <p>プロジェクトの目標に向かって、日々の小さな目標を自分で立てて達成すること、日本語だけでなく母語や英語など総合的にことばの力を伸ばし活かすこと、仲間との助け合いや学び合いを通して切磋琢磨する態度を大きく評価する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・知識及び技能: 毎回のワークシートや短作文の課題の記述状況、学習項目を使っ ての口頭での応答の様子 ・思考力・判断力・表現力等: 考えるプロセスにおける他者とのやりとり(質問等)、 成果物(プレゼン資料、掲示物、提案書)の内容と表現 の工夫の様子、提案に関するプレゼン時の対応(臨機 応変な表現の工夫等)

	<p>・学びに向かう力・人間性等：日本語の学習中や授業内の自由会話、提案書提出などの他者とのやりとりの際に、翻訳アプリだけでなく写真や絵、ジェスチャー、表情などを活用しながら、コミュニケーションを諦めずに続けようとする様子。</p>
--	--

★ 4.3 授業実践例で紹介

4.3 授業実践例（年間指導計画のユニット5）

ユニット4<伝えよう・紹介しよう>では、文化祭向けに自分の出身国について掲示物を作成したが、生徒は国レベルではなく自分自身について広く周囲に知ってほしいと思っている様子が窺えた。また、知ってほしいことを挙げるにつれて、自分たちが抱えている問題も見えてくるようになり、その問題を解決したい（現状を変えたい）という思いが芽生えているのが見てとれた。ユニット4の学習は生徒らの学校行事への積極的な参加につながり、クラスや学校の多くの生徒や教職員に自分を知ってもらい、人間関係を構築するきっかけとなった。

そこで、自分を変えたいと思っていることを他者に伝え、働きかけることができるようになることを期待して、ユニット5<学校を変えよう>プロジェクトを設定した。

以下では、ユニット5の3・4時間目の授業について紹介する。まず、ユニット5の第1・2時で、学校に変えてほしいと思う内容を思いっだけ書き出した（ワークシート「もし、私が校長先生だったら？」）。第3・4時では、実際に教員に要望を伝えることを念頭に、提案書を書き上げる活動を行った。手順としては、まず、ワークシート「もし、私が校長先生だったら？」に書き出した要望から一つをピックアップする。次に、提案に必要な文型を示したワークシート「提案書」を利用し、作成するようにした。

(1) 学習指導計画（ユニット5の3-4時間目 ★印）

①目標

知識及び技能：提案する際の表現を理解し、使用できる。

思考力・判断力・表現力等：実際の提案の場面をイメージしながら、実現性のある提案を選択したり、説得力のある文の順序を考えたり、その場面に相応しい言い方を考えて表現したりできる。

学びに向かう力・人間性等：これまでに学んだ漢字や語彙・文型を積極的に使って、自分を表現するための新たな文を作ろうとしている。他者の提案を聞いて、それを自分ごととして考えようとしている。

②学習指導計画

	学習活動	語彙・表現	指導上の留意点 教材など
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・前回のワークシート「もし私が校長先生だったら」を振り返る ・「提案書」について知る 		<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートの内容を聞き出す ・お互いの内容を確認する ・提案書ワークシート配布 ・ワークシート中のモデル文に注目させ、意味・機能を説明する
展開1	<p><要望を選ぶ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回のワークシートから自分の要望の一つを選ぶ ・モデル文を使って文型の形（「V マス形+たい」「V 夕形+らしい」）と用法（希望、願望・勸） 	<ul style="list-style-type: none"> ・文型「～たいです」「～たらしいと思います」の導入・練習 ・実際に自分の要望を学習した文型を使って言う練習→読む・書く練習 	<ul style="list-style-type: none"> ・必要に応じて語彙・漢字の指導 ・必要に応じてマス形・夕形の確認

	め)を確認する		
展開 2	<要望の理由・目的を言う> ・モデル文を使って文型の形 （「なぜなら～からです」）と用法 を確認する	・文型「なぜなら～からで す」の導入・練習 ・実際に自分の理由・目的 を学習した文型を使って言 う練習→読む・書く練習	・必要に応じて語彙・漢字の指 導 ・必要に応じて「～ば、～に/ なると思います」「でも/しかし」 も導入
	休憩		
展開 3	<具体的なアイデアを出す> ・モデル文を使って文型の形 （「たとえば～はどうでしょう か」）と用法を確認	・文型「たとえば～はどうで しょうか」の導入・練習 ・実際に自分のアイデア を学習した文型を使って言 う練習→読む・書く練習	・必要に応じて語彙・漢字の指 導 ・「～」部分に動詞がくる場合は 「の」が入ることを確認
展開 4	文章の組み立てを考える		・生徒の文を板書して、視覚化 しながら話し合う
	提案書を書く		・提案書の下書きとしてノート に書いたものを教師がチェック
まとめ	共有と相互評価 ・自分の提案書を読み上げる ・他の生徒の提案書を聞いて、 自分の意見を言う		

③評価

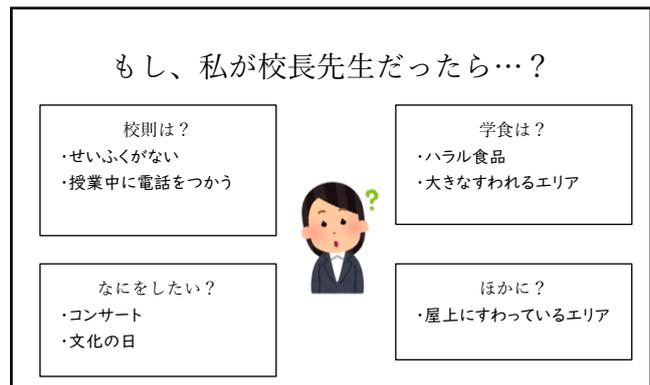
知識及び技能：ワークシートにおける提案の表現の適切な使用。

思考力・判断力・表現力等：提案の選択や文章の組み立てを考えるプロセスにおける教師とのやりとり（質問等）、提案書の読み上げの様子（気持ちがこもっているか等）。

学びに向かう力・人間性等：ワークシートの記載状況（漢字等の使用、文の数等）。他者の発表を聞いている時の態度（関心を持って聞いているか等）と聞いた後の発話の内容（質問・意見等）。

(2) 授業の実際

生徒たちは、自分の提案したことで学校を少し変えることができるかもしれないというモチベーションで意欲的に参加できていた。どういう手段を使うと相手に伝わりやすいのか、またどういう日本語表現だったら自分の言葉として発することができるか、率先して考えることができていた。



<話し合い活動で利用したスライド>

<展開2~4で利用したワークシート>

高岡向陵高等学校 校長先生 先生方 年 月 日
提案書
提案者名 [生徒名]
コンセプト（～たいです。～たらしいと思います。） ハラール食品を学校の食堂で食べたいです。
課題の背景（なぜなら～からです。～でも/しかし・・・。～は・・・く/になります。） なぜならハラール食品がないからわたしたちはまいにちおべんとうをもってこなければいけません。私たちは飲みものだけを買ひ、ほかにはなにも食べられません。
具体案（例えば～はどうでしょうか。） 週に1回ハラールの料理をたべられるのはどうでしょうか。

<学習の様子>



私たちの提案についてどう思いますか。先生方のご意見を教えてください。
[生徒名] の提案について
ハラール食品を食堂に置いてもらいたいという提案や、週1回ハラールの日が設けられるという提案はおもしろいと思います。異文化を理解する意味でも、他の生徒にとっても勉強になると思いました。食堂は学校とは別の会社なので、願ひしてみるのもいいかもしれません。（[教員名]）
メリット、デメリットの検討も加えられるとよいと思います。コスト面、安全面（調味料の中に含有している可能性）など、いろいろ着眼点があると思います。（[教員名]）
ハラール料理を学食のレパートリーに加えるのは、コスト的にも難しいと思いますが、購買にハラール認定の食品、お菓子をに入れてもらうなどは相談次第に思ひます。（[教員名]）
食堂に提案してみてもいいですか。（[教員名]）

<生徒の提案に対する教員からの意見>

4.4 資料 2023 年度のプログラムの実施状況

2023 年度 キャリアアップ日本語(2 年次) 4 単位(2時間×週2回)

対象生徒は9 名で、滞日歴は日本生まれ・育ちの生徒から来日 3 年程度の生徒まで、日本語の力も母語等を交えながらであればようやく日常会話がこなせるレベル(日本語能力試験 N4~5 程度)から、読み書きや教科の学習には多少困難があるものの日常会話には何の支障もないレベル(N2 程度)までと、様々であった。そのため、1 学期においては、(5-6 限の連続授業の)5 限に漢字・語彙・文法(読解)といった言語知識に重点を置いた学習を行い、6 限に言語ポートレートやマインドマップを使った自己を見つめる活動などを取り入れた。生徒の日本語力に大きなばらつきがあったことから、6 限は共有や発表など全体での活動を心がけたものの、5 限は ICT を活用した個別学習が中心となっていた。5 限の学習と 6 限の活動の間の関連性はほとんどなかったと言ってよい。

2 学期のはじめに、学校生活や1 学期の授業を振り返っての感想を生徒に聞いたところ、不満が噴出。何のためにこれを学ぶのかわからないといった学習内容への疑問や、個別学習の時間が多い上、プレゼンやディスカッションに個別学習の内容が活かされておらず、学んだことが身につかないといった学習方法への鋭い批判であった。また、学校全体(多くの教員)が、自分たちのことを理解してくれない、理解しようとしなないといった

声が上がリ、大人や社会に対する失望にも似た気持ちを抱いていることが分かった。

そこで、2学期からは学習内容・方法を大きく見直した。まず、生徒たちが日常生活で感じたり考えたりしていることであり、自身の利害関心に基づいていることとして、「教科学習や定期考査での困難に対する教員の理解と配慮、そして不当な低評価への抗議とそれらに関する改善の要求」を目標に据えたプロジェクト型の活動に切り替えた。言語項目の学習は、初級文法から高度な漢語語彙までこのプロジェクト遂行に必要な漢字・語彙・文法を軸に行い、ペアワーク、グループワーク、全体ディスカッションを中心に進めていった。論理性や情報の整理(箇条書き・カテゴリー化等)、文章タイトルの考案など、国語科で扱われているような内容にも踏み込んでいった。

時に脱線しながらも(能登半島地震直後の授業では、災害時の情報収集や避難に関する話し合いを行ったりした)、2学期から3学期の約半年をかけて、生徒たちはどうすれば自分たちの思いや考えが教員に伝わるかを考え抜き、日本語で「要望書」を作成し、学校長に手渡した。この後の授業の振り返りでは、生徒たちの達成感や満足感が伝わってきたと同時に、以前であればほとんど白紙であった感想や意見を書く欄にも様々な日本語でのコメントの記載があり、「自分たちのためにできることがたくさんあることが分かった」と自己肯定感・有用感を高めた様子や、「多様な意見や考えがあることが分かった」「要望書のおかげで学校が変わって、この高校に入りたいという人が増えるといい」など、想像の幅を広げて他者を理解し、自分の利益だけを追求するのではなく他者の利益のために行動することの意義を見出した様子が窺えた。

3学期期末考査の内容は、生徒たちが作成した要望書にまつわるもので構成したものの、特別正答率が以前に比べて高まったとか、より多くの漢字・語彙を覚えたとかいったことは言えなかったが、生徒たちがプロジェクトを通して学んだ日本語表現を実感を持って理解・使用し、精神的にも成長している様子を見ながら、内容や方法を工夫したプロジェクト型の学習によって、週に数時間の短い時間であっても、その中で学ぶ日本語が生徒たちの学校生活全体を活性化していく「エンジン」となるのだということを感じた。